

# フィリッピーネ・ヴェルザーの浴室

The Bath of Phillipine Welser

保井 亜弓  
YASUI Ayumi

## はじめに

オーストリアの西に位置するティロル州の州都インスブルックの郊外、小高い丘の上にそびえるアムブラス城。大公フェルディナンド2世（1529-95）の「芸術および驚異の部屋」で知られているが<sup>1</sup>、実は城内には16世紀の貴重な浴室がある。大公の妻であったフィリッピーネ・ヴェルザーの浴室がそれである。後の改築を経ているものの、浴室の基本的な構造は当時のままで残されている。本稿ではその成立の背景をたどりつつ、16世紀の珍しい浴室の遺構を詳しく紹介するとともに若干の考察を加える<sup>2</sup>。

## 1. インスブルックとハプスブルク家

ティロル州は、北はドイツ、南はイタリアに接している。すなわちインスブルックは、北方、とりわけドイツとイタリアの間を往来する人々にとっての中継地だった。16世紀当時の町の様子は、2度のイタリア滞在を経験したアルブレヒト・デューラーによる風景水彩画の傑作のひとつに数えられる《北から見たインスブルック》(図1)において捉えられている。1496年の年記があるこの風景画は、したがって彼の最初のイタリア旅行の際に描かれたものである。イン川の向こうから見たその眺望には、現在は18世紀にバロック様式に改築された大聖堂<sup>3</sup>が未だゴシック様式の姿で描かれている。

ティロル地方は、後に神聖ローマ帝国皇帝となるマクシミリアン1世（1459-1519 在位1508-1519<sup>4</sup>）により1490年にハプスブルク家の支配下に入った。

彼がインスブルックに宮殿を建造したことから、この町は政治と芸術の中心地となった。町の中ほど、飲食店で賑わう広場に面した「黄金の小屋根 Goldene Dachl」は、屋根が2657枚の金箔を貼った銅葺きであるためにこの名で呼ばれる（図2）。皇帝マクシミリアン1世が二度目の妻ビアンカ・マリア・スフォルツァ（1472-1510年）との結婚（1494年）を祝って作らせたもので、その建築は1497/98年に始まり1500年に完成した。黄金の屋根は、かつてこの広場で行われた馬上槍試合などを皇帝が観覧するためのバルコニーを覆っている。バルコニーはレリーフで飾られており、その上段には、マクシミリアン1世が二度目の妻と最初の妻マリー・ド・ブルゴーニュ（1457-1482）と一緒に姿をあらわす様子が刻まれている（図3）<sup>5</sup>。

インスブルックはまた宮廷聖堂（Hofkirche）の皇帝マクシミリアン1世の墓碑でも知られている（図4）<sup>6</sup>。宮廷聖堂には、見事な装飾が施されたマクシミリアン1世の墓碑が据えられているものの、実はその遺骸はここにはなく、彼はその遺言によりその生地であるヴィーナー・ノイシュタットの城の聖ゲオルギウス礼拝堂に葬られているので、ここは空墓（Kenotaph<sup>7</sup>）である。墓碑の両側には28人のブロンズ彫像が立ち並び、それらは概ねハプスブルク家に関連する人物を象っている。等身大を超える彫像を従えた巨大な墓碑の姿は壮観である。この墓碑の構想は1502年には開始されていたものの、皇帝の死後その墓碑およびブロンズ像をインスブルックに移動させて新たに聖堂を建てたのは、マクシミリアン1世の孫である皇帝フェルディナンド1世であ

り、これを1584年に完成させたのがその次男である大公フェルディナント2世なのである。

さらに18世紀にはマリア・テレジアが、1765年の息子大公レオポルトの結婚式のために、皇帝マクシミリアン1世そして大公フェルディナント2世が使用してきた王宮（Hofburg）を壮麗なロココ様式に改築した。マリア・テレジア自身はインスブルックを若い期期とこの年の2度しか訪れることはなかったが、この王宮が今に伝わっている。

## 2. フィリッピーネ・ヴェルザー

フィリッピーネ・ヴェルザーは、1527年にアウクスブルクでフランツ・ヴェルザーとアンナ・アドラーとの間に生まれた<sup>8</sup>。ヴェルザー家は、フッガー家と並ぶ、アウクスブルクの豪商の一家であった。フィリッピーネの祖父アントン・ヴェルザーは裕福なカタリーナ・ヴェーリンと結婚し、胡椒などの香辛料の交易で財をなした。ヤーコプ・フッガーがカール5世を金銭的に援助し、とくに皇帝選挙に際し多額の金を融通したことはよく知られている。一方、フィリッピーネの叔父であるバルトロメウス・ヴェルザーもまた、1526年にカール5世にヴェルザー家が所有するヴェネズエラを貸し付け、その見返りに一家は北部南アメリカの支配権を与えられた。この一件は、ヴェルザー家の繁栄の最後の頂点でもあった。というのも彼の息子はアマゾンに黄金の島を虚しく追い求めることに心奪われたからである。

フィリッピーネはその美貌で知られていたにもかかわらず、年頃になっても嫁ぐ気配を見せなかった。29歳になる1556年には、母方の叔母であるカタリーナ・フォン・ロクサンの住むボヘミアに移っている。カタリーナは、ボヘミアの副領主ゲオルク・フォン・ロクサンと結婚し、すでに長く未亡人であった。彼女はプラハの宮廷とも商売の取引をしており、その関係で皇帝フェルディナント1世および大公フェルディナント2世と知り合っていたと考えられている。彼女の居城であるブレスニッツ城は社交の場で

あり、おそらくそこでフェルディナント2世は美しいフィリッピーネと出会ったのだろう。しかし裕福な貴族とはいえ皇族との身分違いの結婚はとうてい許されるものではなかった。皇族や王族は政略結婚することが常識であったこの時代に、それでも大公はこの自由恋愛を貫くことになる。とはいえふたりの結婚は、皇帝にも知らされず、公にされることはなかった。

ところが、1558年に長男のアンドレアスが生まれると、二人の関係は皇帝の耳にも届くようになり、皇帝は1559年にはやむなくふたりの関係を認めたものの、すべてを内密にするという掟を与えた。次いで1560年には次男カールが生まれ、皇帝はこのハプスブルク家の血を引く子どもたちに年金30000グルデンを与えることとした。二人の間には、さらに1562年に双子が生まれたものの、すぐに亡くなってしまった。大公は、妻と二人の息子をブラハ郊外のビュルクリッツ城に住ませた。しかし彼がこの城を頻繁に訪れるわけにはいかなかった。

そして1564年には皇帝フェルディナント1世が逝去する。皇帝の座は長男が継いでマクシミリアン2世となり、大公フェルディナント2世はティロルを統治することとなった<sup>9</sup>。しかし、1559年の皇帝の掟により、都インスブルックの王宮に二人が一緒に住むことはできない。そこでフェルディナント2世は、ちょうどゲオルク・シュルフ・フォン・シェーンヴェルトの遺産として売りに出されていたアムブラス城を購入し、フィリッピーネに贈った。1567年フィリッピーネは、母アンナとカタリーナ・フォン・ロクサンそして子どもたちと共にアムブラス城に転居してきた。

アムブラス城では二人の生活を送ることができたものの、フィリッピーネが公式の場では影の存在であることには変わりはない。長男アンドレアスは聖職者となり、1576年フェルディナント2世は息子がスペインと帝国を代表する枢機卿となることを望んだが、そのためには両親の関係が正式に認められることが不可欠であった。教皇グレゴリウス13世はすでにフィリッピーネに祝福されたロザリオを贈っ

ていたが、今一度承認されねばならなかったのである。同年二人は念願の証文を教皇より受け取ることができ、アンドレアスは枢機卿となった。彼は後にコンスタンツとブリクセンの司教を務めた。ようやくフィリッピーネは表舞台に出ることができ、大公フェルディナント2世と対をなす公式な全身像の肖像画も初めて描かれた。およそ50歳の彼女は、豊かに毛皮があしらわれた、スペインの流行に影響を受けた高襟のドイツのドレスをまとっている(図5)<sup>10</sup>。また、この時期には、父や兄弟もフィリッピーネの栄光の恩恵を受け、弟のハンス・ゲオルク・ヴェルザーは大公宮廷顧問に採用された。

大公もフィリッピーネも敬虔なカトリックであった。カタリーナ・フォン・ロクサンはプロテスタントだったが、インスブルックに移ってからカトリックに改宗した。プロテスタントの信仰はこの地方にも及んでいたものの、彼は、兄の皇帝マクシミリアン2世とは異なり、新しい教義には懐疑的で、とくに再洗礼派に厳しくあつた。

1570年以降、もともと病弱だったフィリッピーネはとりわけ体調すぐれず、侍医ゲオルク・ハントシュの勧めもあり、しばしばフェルディナント2世と共に当時中央ヨーロッパで最良の温泉と言われたカールシュタットやボヘミアに湯治に出かけた。1580年4月13日カタリーナ・フォン・ロクサンが亡くなり、それを追うように同月25日フィリッピーネは世を去った。彼女の亡骸は叔母と共にインスブルックの宮廷聖堂内にある銀の礼拝堂に葬られた<sup>11</sup>。

### 3. アムbras城

アムbras城は10世紀に建てられた要塞であり、皇帝マクシミリアン1世はこれを狩猟の館として利用していた。大公がこの城を手に入れたとき、老朽化が激しく、大規模な改修が必要だった。1564年に大公の直接の指示の下で、現在のルガーノに位置するパンビオ出身の建築家アルベルト・ルッケーゼがこれを手がけ、壮麗なスペイン広間や新しい厨房そして浴室が設えられ、アムbras城は当世風の華麗

な城に生まれ変わった。

整えられた庭園には迷宮、グロッタ、噴水などばかりでなく、薬草園があり、フィリッピーネは侍医ゲオルク・ハントシュおよび城内の薬剤所に勤めた薬剤師ゴリン・グラントの協力を得てさまざまな新薬の処方を考案した。それらは1560年から1570年にかけて母アンナによってまとめられ、写本としてアムbras城に現存している<sup>12</sup>。

「芸術および驚異の部屋」を持つ、大コレクターとして知られる大公フェルディナント2世は、当時の宮廷コレクションとしては珍しく版画も収集していた。現存する版画コレクションとしてはもっとも早いもののひとつである<sup>13</sup>。また当時の宮廷の例に漏れず、集められたものの中には、珍奇なものや動物だけでなく、さまざまな人間も含まれていた。よく知られているのはトレントのリーガ・デル・ガルダ出身の宮廷巨人バルトルマ・ボンと小人のトメレである<sup>14</sup>。トメレの身長は、65cmだったという。ボンの似姿を表した人形とその甲冑は当時のものと考えられ、2m40cmとも2m60cmとも言われるその巨人の様子をリアルに伝えている(図6)。

とりわけ1476年以降、アムbras城では華やかな宴が催され、その名声はティロルを超えて広く知れわたった。フィリッピーネとカタリーナ・フォン・ロクサンが自ら厨房に立ったとも言われる、珍しい香辛料を用いたその料理は評判になった。一方知的好奇心旺盛なフェルディナント2世は、学者や詩人と語り合うことも好んだ。政治的には、彼はハンガリーに迫るトルコに手を焼いており、その立場は苦しかったものの、フィリッピーネが幸福な生涯をおくったアムbras城は、知と優雅さに包まれていた。

### 4. 浴室

すでに述べたように、浴室は大公フェルディナント2世によるアムbras城の改修に際して1565年頃建造された。1571年から1572年にかけて作られたアムbras城の目録に「殿下の寵愛のための浴槽 padwannen für Ihr Granden」とある<sup>15</sup>。この寵愛と

はフィリッピーネに他ならず、この浴室はまさに彼女のために造られたのだった。ここでは、フィリッピーネだけでなく、大公や息子たち、あるいは客人も入浴を楽しんだことだろう<sup>16</sup>。

現在アムbras城を訪れると、まず入り口から「芸術および驚異の部屋」に進むことになるが、浴室があるのは向かい側の建物、広々としたスペイン広間を抜けて本館に入った一階である。この場所はかつて15世紀に建てられた牢屋だった<sup>17</sup>。

浴室建築は、当時アムbras城の図書館に所蔵されていた、古代ローマの建築家ウィトルーウィスの『建築書』のドイツ語版に拠っているところが大きい<sup>18</sup>。第5書第10章に浴室の配置についての記述がある。ウィトルーウィスの『建築書』は、ルネサンス時代に人々の関心を大いに集め、1521年にイタリア語訳、1547年にフランス語訳、1548年にドイツ語訳が出版された。ドイツ語版はニュルンベルクのヨハン・ペトリウスによって出版され、訳者はヴァルター・ヘルマン・リフ（ラテン語名グアウテリウス・ヘルメニウス・リウィウス）である。リフは原文をかなり自由に翻訳している。古代ローマ式の浴槽を描くその挿絵はイタリア語版に基づいており、そこにはウィトルーウィスの記述に従った三つの壺が載せられている湯沸かし炉が表されている。下の熱い湯、中央のぬるい湯、上の冷たい水それぞれの壺下部についている蛇口から必要な量の湯をとることができるようになっている（図7）。

1839/49年の城の平面図浴室部分（図8）<sup>19</sup>は、基本的に当初の姿を示しており、浴室建築そのものは現在もそのままに残っている。われわれは、11の廊下を通過して左手に浴室の入り口を見出す。入り口から15の廊下に入ると、まず16の蒸し風呂または熱風呂がある。15の廊下をさらに進んだ先の17が脱衣所または休息室である。そしてその奥に18の浴室がある。以下それぞれの部屋を詳しく見ていこう。

### 蒸し風呂または熱風呂

この部屋には、図面ではおそらく当初の円形を示しているものの、現在は方形の<sup>20</sup>、湯沸かし炉があ

る（図9）。湯沸かし炉は少し高い位置にあるため、中が見えるように現在は上に鏡が備え付けられている。湯沸かし桶の左には煙突があり、また反対側には熱した石が置かれる壁龕がある（図10）。一方、壁龕の熱した石は水に投げ込まれて湯を作るのに使われたばかりでなく、石に手桶で水をかけて水蒸気を発生させることで部屋は蒸し風呂となった。デューラーの素描《女風呂》（図11）は、蒸し風呂を表しており、画面右奥に壁龕があって石が積まれている。この部屋では、湯沸かし窯からの蒸気も加わって、全体が蒸し風呂となったはずである。この部屋が蒸し風呂であったという記述はないものの、フィリッピーネの母がまとめた薬事書には、蒸し風呂の後で温浴することの効用が書かれている<sup>21</sup>。また、図面では、この壁龕から17にある×印の暖炉に熱を送る通路があるが、現在は1855年頃造られた壁により塞がれている。ちなみに現在見ることのできる、17と18の両室を温めるこのタイル張りの暖炉は19世紀のものである。

### 脱衣所または休息所

この部屋では、文字通り服を脱ぐののだが、そればかりでなく入浴のための入浴着を着る場所でもあった。当時の入浴図では人々が入浴着を着ているのが見られ、ドイツ語では男性の下履きはBruoch、女性のエプロンのような薄物はBadeehreと呼ばれた（図12）<sup>22</sup>。女性の入浴着は、本来は胸を隠すように着用するが、この図では胸を晒している者もいる。さらに別の入浴図では、入浴者はしばしば被り物をつけている。麦わらで編まれた帽子や頭巾があり、これらの入浴帽は熱から頭を守る役割を果たした。多くが平たい入浴帽はデューラーの《女風呂》で見られる（図11）。宮廷では、この入浴帽にも贅を凝らし、真珠や金銀糸を用いて飾った（図13）<sup>23</sup>。麦わら頭巾の方は、男性が日光浴ばかりでなく、入浴時にもこれを被った。デューラーの《男風呂》でひとりが被っているのがそれである（図14）。また、公衆浴場でいろいろな施術をする湯男もたいていこれを被っている。アムbras城の1596年の目録に記録されている

麦わら頭巾は金糸が使われた豪華な一品である（図15）<sup>24</sup>。

また、この部屋が休息室と呼ばれるように、入浴後あるいは入浴の間に休息をとる部屋でもあった。1571年から1572年の目録では、ここに木製の天蓋付きベッドがあったことが記録されている。このベッドは1788年の目録にも記されているものの、残念ながら現存してはいない<sup>25</sup>。また、1571年から1572年の目録によれば、ベッドの横にはトルコの絨毯で覆われた机とろくろ作りの木製のランプがあった。

部屋の入口上の破風には1567年の年記がある。装飾は簡易ながら質が高く、アムブラス城の支払い記録にある指物師ハンス・ヴァルトナーと関係づけられる。1876年の修復を経てオリジナルが残るのはわずかである。

壁は約160cmの高さまで板が貼られており、その上部はフリーズ状の漆喰壁となっている。そこには4面にフレスコ画が描かれており、湿気のために状態はよくないとはいえ、画面を確認することができる。《ディアナとアクタイオン》と《若返りの泉》が向かい合う長い壁にあり、《園庭での宴》と状態が悪いため確認が難しいものの、おそらく二人の入浴者を半身で描いた画面が窓を挟んでいる。ディアナの水浴を見てしまったアクタイオンが鹿に変身させられるという物語と老人が泉を浴びると若返るという「若返りの泉」の伝説そして《入浴図》はいずれも入浴にまつわるにまつわる主題である。《園庭での宴》は直接入浴を示していないものの、入浴しながらあるいは入浴後に音楽を聴いたり、飲食したりして愉しむことは当時の常であった。さらに、《ディアナとアクタイオン》および《園庭での宴》は、大公フェルディナント2世の版画コレクションにある銅版画との図像の類似が指摘されており、壁画制作にあたって大公自身がコレクションを参考にさせた可能性がある。《若返りの泉》の木版画はコレクションにはないものの、版画を見なければ描くことができないほどに図像が一致しているため、やはり版画的参照が考えられる<sup>26</sup>。一方図様の判別が難しい壁画はおそらくデューラーの版画に基づき翻案されたも

のとされる。フレスコ画は、1563年から1567年の間に、おそらくハンス・ポルハンマーによって描かれたとされる<sup>27</sup>。

## 浴室

浴室には、幅274cm、奥行き194cm、深さ約160cmというかなり大きな浴槽がある（図16）。浴槽には錫メッキした銅の薄金が貼ってあり、その中央より少し左寄りに腰掛けがある。この腰掛けは、1839/40年の平面図（図8）にも書かれており、当初からあったものと考えられている。当時入浴者が直接風呂の床に座ることは稀であったので、腰掛けとして使ったものと考えられている<sup>28</sup>。

浴槽は窓に面している。これはウイトルーウィウスの『建築書』に記された浴場の配置の記述に沿ったものである。浴室は「冬季西から光を採る。しかし土地の状況がそれを妨げるならば、とにかく南から採る<sup>29</sup>」とある。

部屋の床および壁は板張りであり、水に濡れることに適している。現在の壁は、1855年から1913年の間に城の管理者であるシュトルムによって新しく張り替えられ、床はさらに新しいものとなっている。

当時のこの浴室の設えはどのようなものであったのか。それを想像させるのが、1567年に「水の芸術家」ゲオルク・シュミットが真鍮で制作したというさまざまな蛇口の記録である。ライオンの口の蛇口からは湯と水が浴槽に流れており、浴室の前の大理石の上にはバグパイプを使った噴水が置かれ、その装飾としてヤマガラシ、ザリガニ、カエル、亀、トカゲといった11匹の鮮やかに彩色された水辺の動物があしらわれていた。それはユーモアにあふれる心地よい空間だったに違いない。

また、この浴室では健康のための入浴として薬草風呂も行われていた。すでに述べたように、フィリップペネは薬草の処方に関心を持っており、これはパラケルススの著作に影響されたところが大きい。実際にアムブラス城の図書館にはパラケルススの『入浴の書Pader Püechl』が所蔵されていたことが記録されている<sup>30</sup>。1493/94年に現在はスイスの

シュヴィツ地方にあるエックで生まれたパラケルススは、医師、錬金術師、天文学者、神秘学者、哲学者とさまざまに呼ばれるが、水による療法を初めて確立した人物でもあり、『入浴の書』には水温や含有物とその効用を記されている。また、薬草風呂や飲泉療法などにも言及されている。

浴室では、単に湯に浸かっただけではない。当時の公衆風呂の場合と同様に、髪を洗ったり、髭を剃ったりしたであろうし、その他さまざまな用具、水差し、盥、石鹸、ポマード、櫛、ブラシ、耳かき、舌削りなどが持ち込まれていたはずである<sup>31</sup>。アムブラス城には、女性の小部屋に当時は非常に高価であったガラスの鏡があったと記録され、また居室にあったとされるフィリッピネの豪華な化粧箱は現存している（図17）。大公フェルディナント2世の部屋にも、ガラスの鏡の他に「耳かきorraumer」や「歯間楊枝 zandstürrer」が記録されている<sup>32</sup>。歯の衛生はリフの書籍でも大いに推奨されており、通常は一方に穴が開いていて首飾りや腰鞆につけて日常的に使用されたが、アムブラス城の芸術および驚異の部屋に伝わる歯間楊枝は巧みな細工や絹や金銀糸で飾りが施され、まさに優れた工芸品となっている（図18）<sup>33</sup>。

## おわりに

当時インスブルックには入浴の習慣がすでにあり、領主たちは館に浴室を持っていて朝入浴したという。ティロルのハル近辺にあるハイルバート・ハイリッヒクロイツは1342年より治療泉としてこのように名付けられ、ここから水がアムブラス城にも運ばれていた<sup>34</sup>。フィリッピネと大公フェルディナント2世が健康のための入浴を重視していたのには、このような背景があった。ペストや梅毒が流行した影響で、ドイツの公共浴場は15世紀末から16世紀初めには多くが閉鎖していくことになるが、一方で宮廷では豊かな入浴文化が営まれていた。フィリッピネ・ヴェルザーの浴室はそれを今に伝えてくれる貴重な遺構なのである。

## 註

- 1 「芸術および驚異の部屋」のコレクションは城内に多少展示されているものの、これらは現在ウィーンの美術史美術館に所蔵されている。それは、大公フェルディナント2世のコレクションに以前より興味を抱いていた、彼の甥であり、自身も有数のコレクターであったルドルフ（後の皇帝ルドルフ2世）がこれを彼の死後譲り受けたからである。
- 2 フィリッピネ・ヴェルザーの浴室については、筆者はゼーバルト・ペーハムの版画との関連から簡潔な紹介を行っている。保井亜弓「ゼーバルト・ペーハムの《若返りの泉》—大型木版画を読み解く愉しみ」幸福輝『版画の写像学』ありな書房、2013年、61-102頁。その他の文献としては次の文献があり、本稿はそれに多く依拠している。Sabine Haag (ed.), *Splash! Das Bad der Philippine Welser*, Exh. Cat., Kunsthistorisches Museum im Schloss Ambras, 2012; Margot Thun-Rauch, *Die Badewanne der Philippine Welser: Gesundheit und Genuss*, Kistina Deutsch, Claudia Ecgubger-Maurach and Eva-Bettina Krems (eds.), *Höfische Bäder in der frühen Neuzeit: Gestalt und Funktion*, Berlin/Boston, 2017, pp. 191-203.
- 3 現在の大聖堂は、ヨハン・ヤーコプ・ヘルコマーJohann Jakob Herkomer,により1717年から1724年までの間に改築されたものである。
- 4 マクシミリアンは1486年4月9日にアーヘンでローマ王として戴冠し、1493年8月の父皇帝フレデリック3世の死をもって、ハプスブルク家の領土を支配した。マクシミリアン1世の生涯については、江村洋『中世最後の騎士 皇帝マクシミリアン1世伝』中央公論社、1995（1987）参照。
- 5 建物に備え付けられているのはレプリカ、オリジナルはティロル州立博物館にある。
- 6 吉澤京子「インスブルック宮廷教会の皇帝墓碑—意匠をめぐる考察」『コミュニケーション文化』8、2014、pp.143-146
- 7 ギリシア語κενοτάφιονより。kevos（空の）、τάφος（墓）。
- 8 フィリッピネ・ヴェルザーの生涯については、主に次の文献を参照した。Sigrid-Maria GröBing, *Die Heilkunst der Phillipine Welser: Aussenseiterin im Hause Hapsburg*, Augsburg, 1998.
- 9 大公フェルディナント2世がティロル王となるのは1572年、同年ポーランド王になることも打診されるが、彼はフィリッピネのためにそれを断ったという。
- 10 このフィリッピネの肖像画とライオンの甲冑を着た大公フェルディナント2世の肖像画は、ザルツブルクの画家で、南ドイツの帝国都市で活躍したヨハン・ボックスベルガーに帰されている。
- 11 大公フェルディナント2世は、1581年5月に16歳のアンナ・カテリーナ・ゴンザーガと再婚する。二人の間に生まれた娘アンナ・エレオノーレは皇帝マティアスの妃となり、ウィーンで最初のカプチン会修道院を設立する。

- 12 Schloß Ambras, Inv. No. PA 1474, Rauch, op. cit., p. 78-79, no. 2. 1.
- 13 大公フェルディナント2世の版画コレクションについては、次の文献を参照。Peter W. Parshall, The Print Collection of Ferdinand, Archduke of Tyrol, *Jahrbuch der Kunsthistorischen Sammlungen in Wien* 78, 1982, pp. 139-189.
- 14 1621年の芸術の部屋の目録には、ボンとトメレを描いたと考えられる二重肖像画の記録があり、それに相当する考えられる絵画が残っている。ボンは、1560年にヴィーンで行なわれた皇帝の馬上槍試合の際に大公フェルディナントの甥に随行したことが知られている。トメレは、バイエルンのヴィルヘルム5世とロートリンゲンのレナータの婚礼の宴で菓子から飛び出したという。
- 15 Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Sammlung von Handschriften und alten Drucken Cod. 7998, fol. 198v. (Thun-Rauch, op. cit., p. 191, note 3)
- 16 トウン=ラオホは、200人以上いた廷臣たちも入浴したと推測しているが、はたしてそこまで解放されかどうかは疑問である。Thun-Rauch, op. cit., p. 192.
- 17 Thun-Rauch, *ibid.*, p. 194.
- 18 Haag, op. cit., p. 34-35, no. 1. 2. *Vitruvius Teutsch, nemlichen, des aller namhaftigen und hocherfarnesten Roemischen Architecti, vnd Kunstreichen Werck oder Baumeisters* [...], Walter Hermann Ryff (trans.), Nuremberg: Johann Petrerius, 1548. Heidelberg historic literature-digitized, <https://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/vitruvius1548/0407/image> (2018/11/6閲覧)
- 19 Jg Seger, "Schloss Ambras Ebenerd", ca. 1839/40, Inv. No. A 115.
- 20 1915年に改築が計画され、1913年の平面図ではすでに方形になっている。Margot Rauch, Wellness um 1500: die Badstube der Philippine Welser, Sabine Haag (ed.), op.cit., pp. 10-29, esp. p. 11-12.
- 21 Thun-Rauch, op. cit., p. 196.
- 22 *Ibid.*, p. 199.
- 23 Haag, op. cit., p. 50-51, no. 1. 10.
- 24 この珍しい黄金の麦わら頭巾は、「芸術および驚異の部屋」に見いだされ、インドからもたらされたものと推測されている。Haag, *ibid.*, p. 52-53, no. 1. 11.
- 25 Thun-Rauch, op. cit., p. 199
- 26 これらの壁画と版画については、保井、前景論文を参照のこと。
- 27 ポルハンマーは宮廷画家ではなく、簡単な装飾絵画を手掛けたと考えられる。1565年7月3日に絵画の支払いとして25グルデンを受け取った記録が残る。Thun-Rauch, op. cit., p. 197-198.
- 28 Rauch, op. cit., p. 22.
- 29 『ウイトルーウィルス建築書』森田慶一訳、東海大学出版

会、1989 (1979)、137頁。

- 30 Haag, op. cit., p. 54-55, 1.12; Thun-Rauch, op. cit., p. 193. Philippus Theophrastus Aureolus Bombast von Hohenheim, genannt Paracelsus, *Baderbüchlin Sechs köstliche Tractat/ armen und reycchen / nuetzlich und nothwendig / von Wasserbädern*, Mühlhausen: Peter Schmidt, 1542. Bayerische Staatsbibliothek <https://bildsuche.digitale-sammlungen.de/index.html?c=viewer&bandnummer=bsb00086379&pimage=1&v=100&nav=&l=en> (2018/11/6閲覧)
- 31 Rauch, op. cit., p. 24.
- 32 *Ibid.*, p. 25; Thun-Rauch, op. cit., p. 203.
- 33 Haag, op. cit., p. 58-59, no. 1. 14
- 34 Thun-Rauch, op. cit., p. 193.

#### 図版出典

図1、3 *Kaiser Maximilian I. und die Kunst der Dürerzeit*, Exh. Cat., Albertina, 2012; 図2、4、6、9、10 著者撮影; 図5、7、12、13、15、17 Sabine Haag (ed.), *Splash! Das Bad der Philippine Welser*, Exh. Cat., Kunsthistorisches Museum im Schloss Ambras, 2012; 図8 Margot Thun-Rauch, Die Badewanne der Philippine Welser: Gesundheit und Genuss, Kistina Deutsch, Claudia Ecgubger-Maurach and Eva-Bettina Krems (eds.), *Höfische Bäder in der frühen Neuzeit: Gestalt und Funktion*, Berlin/Boston, 2017, pp. 191-203; 図11 Anne Röver Kann, *Albrecht Dürer: Das Frauenbad von 1496*, Exh. Cat., Kunsthalle Bremen, 2001; 図14 Rainer Schoch, Mathias Mende and Anna Scherbaum, *Albrecht Dürer: Das druckgraphische Werk*, vol.2, Munich, 2002

(やすい・あゆみ 芸術学/西洋美術史)  
(2018年11月7日 受理)



図1 アルブレヒト・デューラー《北から見たインスブルック》水彩画、1496年、ウィーン、アルベルティーナ



図2 黄金の小屋根、インスブルック

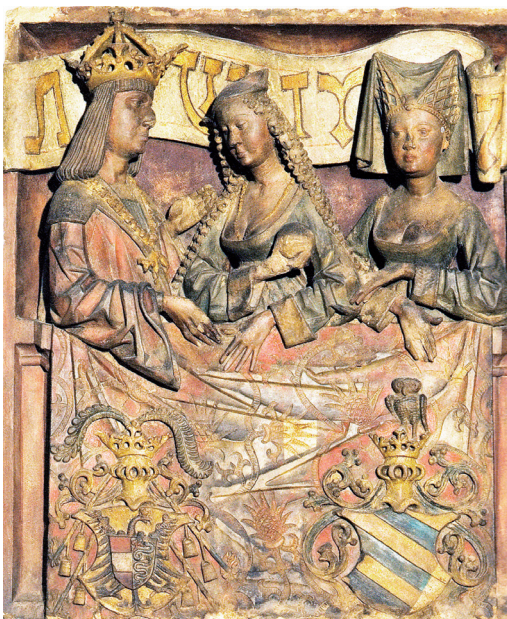


図3 《皇帝マクシミリアン1世とビアンカ・マリア・スフォルツァとマリー・ド・ブルゴーニュ》浮彫、1500年完成、チロル州立博物館、インスブルック



図4 皇帝マクシミリアン1世の墓碑、宮廷聖堂、インスブルック





図5 ヨハン・ボックスベルガー《フィリッペーネ・ヴェルザーの肖像》油彩、1576年以降、アムブラス城（ヴィーン、美術史美術館）



図6 《バルトルマ・ボンの人形および甲冑》、アムブラス城（ヴィーン、美術史美術館）

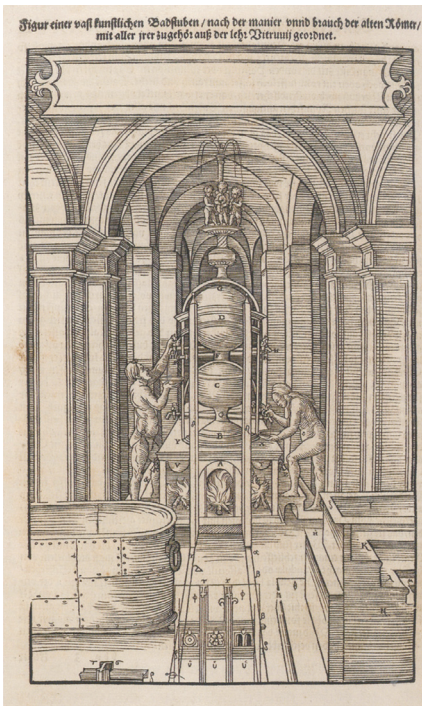


図7 ウィトルーウィルス『建築書』ヴァルター・ヘルマン・リフ訳、1548年、第5書第10章挿絵、木版画



図8 アムブラス城平面図浴室部分、1839/40年



図9 湯沸かし炉



図10 蒸し風呂用炉（復元）



図11 アルブレヒト・デューラー《女風呂》素描、1496年、ブレーメン美術館

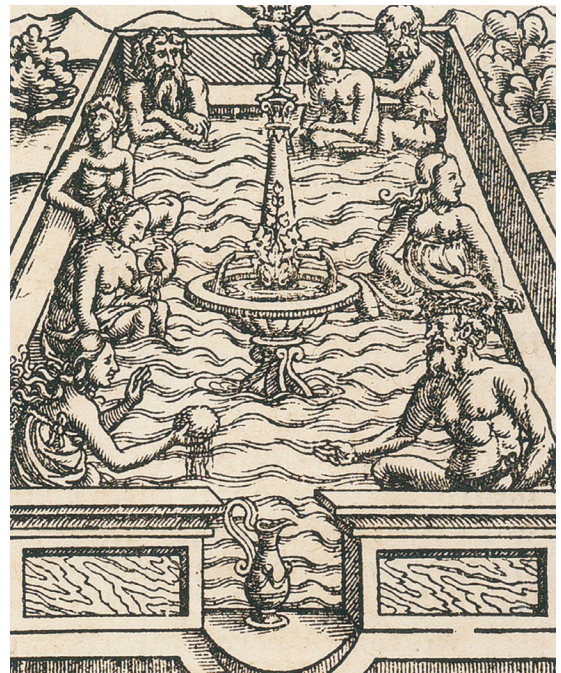


図12 パラケルスス『入浴の書』挿絵、木版画、1562年、



図13 入浴帽、ベンガル?、16世紀後半、ウィーン、美術史美術館

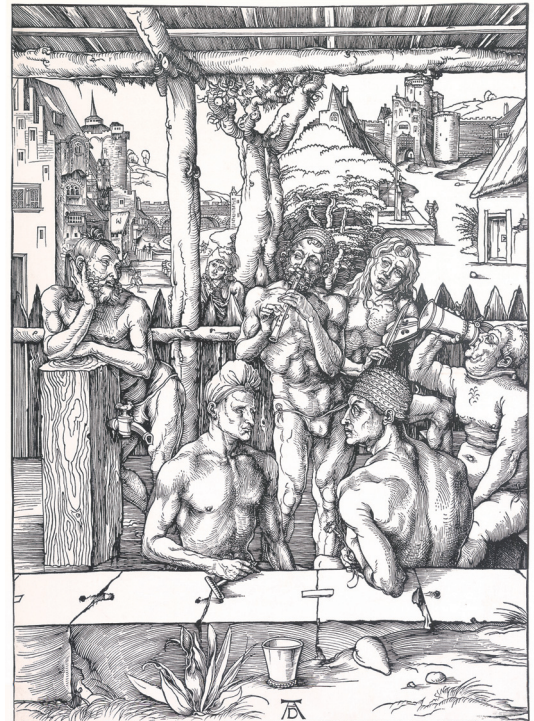


図14 アルブレヒト・デューラー《男風呂》木版画、1496-97年



図15 麦わら頭巾、インド?、1596年以前、ウィーン、美術史美術館



図16 浴室内部



図16 フィリッピーネ・ヴェルザーの化粧箱、ヴェネツィア、1550年、ウィーン、美術史美術館



図17 歯間楊枝、ドイツ、16世紀、ウィーン、美術史美術館